
児玉夫妻の場合

藤井ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

児玉夫妻の場合

【Nコード】

N7212Q

【作者名】

藤井ハル

【あらすじ】

新婚の児玉夫妻が、新居に引っ越してきた日のお話です。

二人の新居は丁度それぞれの職場の最寄りを繋ぐ地下鉄の路線の真ん中辺り、大きな神社が近い駅から歩いて十分程の低層賃貸だった。そこから少し歩けば背の高いビル群が伸びる一帯だというのに、そこは取り残された様に一見どこにもある住宅街の雰囲気があり妙に気に入って決めたのだ。

児玉夫妻（と言っても、まだ役所に婚姻届を出して何週間も経っていないのだけれど）が越してきたのは、正月休み明けてすぐの三連休の初日で、空を見遣ればどこまでも高い青空、気象予報士が脅かした程には北風も強くない静かな日だった。

朝早くに予約していた軽のワゴン車を取りに行き、その足でそれぞれの家を経由して荷物を積んで新居へ向かう算段。荷造りも年末から進めて前日までに終わらせていたから午前中には荷解きを始められると考えていたが、どうにも道が混んでいて新居に到着した頃にはすっかり空腹になってしまっていた。

「どうしよう、何か食べなきゃね。」

とは言い合っけれど、鍋釜もまだ段ボールの中で食材も当然無い。取り敢えず片方がコンビニカスーパーを探しに出掛けてもう片方が荷解きを始める事にし、街の様子を探検してみたいと言ったミキコの方が買い出しに出発した。

残ったヒロシは予め二人で決めていた配置通りに、一旦バラした本棚を組み直し据える事にした。空っぽの本棚をゴムの転倒ストッパーの上に設置して、丁度各段に雑巾をかけ終わった所でミキコが帰ってきた。

「駅の方にドツールがあったからサンドイッチを買ってきたよ。お、早速本棚が組み上がったね。」

「うん、まずその本を片付けようと思って。それだけで大分違うんじゃないかな。」

そう言つてヒロシはサンドイッチの包みを受け取る。

「ゴメンね、私のものばかりで。あれこれ捨てたつもりなんだけど。」

とは言え、ミキコの運び入れた荷物には衣類やクツ、カバンの類いから、山のような書籍に学生時代のサークルの寄せ書きといった「思い出類」に至るまで、二人の荷物の大半を占めていた。一方のヒロシは身軽なもので、簡単な調度や日用品を除けばスーツと数枚の普段着程度の衣類に身の回りのもの、それと書籍がいくらかある位だった。

「そうだ年賀状、何枚か届いてたよ。ほら、私たちのにはこの住所を書いていたから。」

結婚報告も兼ねて初めて年賀状を二人で作ったが、宛先は会社の人を除けば殆どがもう何年も会っていない、年賀状だけの遣り取りの級友や恩師ばかりだった。そんな年賀状のみの関係は次第にほつれた系の様に一本ずつ切れ始め、年に一度の思い出した様な修復作業では追いつかなくなっていく、一人、またひとりと互いに届いたので返信する、というだけの間柄が増えていく。そうして、様々な事を棚に上げながら、自身の土台の儚さを思つて少し寂しい気持ちになるのだ。

「あ、ツルちゃんからだ。元気かなあ。」

何枚目かの年賀状を持ち上げ、ミキコが声を上げた。

「ツルちゃんて、あの同じ大学から一緒に会社入った同期の？」

「そうそう、あの部長も恐れぬ宴会マスター。へえ、結婚したんだ。」

一通り届いたものを確認し、ミキコもサンドイッチを食べ始める。代わりにヒロシがその薄手の文庫本程度の厚さの束を取り、パ

ラパラと何枚か宛名面と裏面を交互に眺める。

「ヒロシ君、なんて言うか・・・ありがとうね。本当に。」

サンドイッチを食べ終わり、ミキコはそう静かに言って立ち上がると、部屋の端の段ボールからガムテープを解き始めた。

「え、どうしたの急に。」

にわかにヒロシにはミキコの言っている意味が分からない。けれどミキコは答えない。聞こえなかったのかな、と思い再び葉書に目を落とす。すると何枚目かの葉書で彼女の言葉の意味が分かった。

それはツルちゃんからの年賀状だった。上半分が披露宴でケーキカットをしている夫妻の写真で、その下に印刷文字の結婚報告に年賀の挨拶と、手書きでこうコメントが添えられたものだった。

「ご無沙汰です。連絡遅くなっちゃったけど、夏に結婚しました！
ってかミキもなんだってね！！オメデトウ！ウチは夏前にはジュニア誕生なんだ！ミキも同級生ママになれるかもよ　また連絡するね
」

*

「さあ、陽が落ちるまでにベッドまでは置かなきゃいけないね。」

ヒロシも立ち上がり、葉書の束をまだ空の本棚に置いて段ボールから溢れ出るガラクタと格闘するミキコの方へ積み上がる段ボールをかき分ける。

「そうだね。とにかく段ボールを潰して場所を作ろう。本をみんな本棚に並べてしまおう。」

書籍が詰まった段ボールは全部で四箱あって、内三箱がミキコの物だった。それぞれを部屋の中から探し出し、南に向けた窓のすぐ脇に据えた本棚の前に集めた。

「棚はもう、雑巾かけたから。」

段ボールのガムテープを剥がし、ミキコの持ってきた、大分年季の

入った何冊かの図鑑から下の段に並べていく。

「あ、これ。私も持つてるよ。」

ヒロシの段ボールの底に並んだ漫画本を見つけてミキコが言った。それは十年以上昔、二人がまだ中学か高校に通っていた頃世間で流行ったスポーツ漫画の単行本だった。

「あ、全巻揃ってる。私も三十一冊全部持つてきちゃったよ。ヒロシ君も好きだったんだ、他に漫画持つてきてないし。」

「うん、他は全部売っちゃったんだけど、これだけ残しておこうかなって。」

「それじゃあ、私のを古本に出すね、ダブってもしようがないから。」

そう言つて自分の段ボールから同じシリーズを取り出して本棚の右脇にドスンと積んだ。

私は他にもあれこれ持つてきちゃったからね、と空になったヒロシの段ボールを潰して玄関先にひよいひよい、と運んでいった。

本棚に二人が持つてきた本を並べ終え、ベッドやソファといった大きい家具を据えていく。衣類や細かいガラクタ類を除いて取り敢えず一段落となった。

ベランダに向けて置かれたソファに座つて一息つく。短かったこの年末年始はずっと親戚の集まるヒロシの実家で過ごしていたが、何とも長かった、というのが二人の（特にミキコの）正直な感想だった。体の事については結婚の前から説明はしていたのであれこれ言われはしなくても、そこはかとなくミキコに刺さる視線が辛かった。三ヶ日が過ぎて慌ただしく夫々の職場に戻り、ようやくここまですり着いたかと思うと、座り慣れたはずのソファに二人の体がどんどん沈んでいくような気分になった。

「うん、そうしよう。」

と、突然に隣りから大きな声を聞きミキコは驚いて、

「え、どうしたの。」と聞き返した。

ヒロシは四つん這いで本棚脇のミキコの三十一冊に手を伸ばして「偶数と、奇数、どっちが好き。」と聞いた。

ヒロシがニツと笑いながらも目を見てそう言うのに一瞬たじろぎ、反射的に偶数、と答えるとヒロシはそうか、と棚から彼が唯一持ち込んだ漫画本を端から端まで取り出して積み上げた。

「ほら、ミキもこっちへ。ミキの漫画を一つ飛ばしに二つに分けて

」

「え、どういう事。」

戸惑うミキコを横目で笑いながら、ヒロシは自分の本を二つに分けた。一巻を左に、二巻を右に、三巻を左に積んでいく。分けも分からないままミキコも手放すつもり漫画本を二つの山に分けていき、偶数巻の山と奇数巻の山が二つずつ、二人の前に並んだ。

「こつ、しようと思うんだ。」

ヒロシは自分の一巻を本棚に戻し、次にミキコの二巻、そして自分の三巻目と、次々に本棚に戻していった。

「これでいいんじゃない？ 僕は。」

ヒロシは本棚に並べ直された漫画本の背表紙を指でなぞってもう一度ニツと笑った。

あ、そういうことか、と目を丸くして、ミキコも真似して背表紙を指でなぞる。

「いいのか。うん、いいのかもしれないね、これで。」

「年賀状だって二人で作ったんだ。これが僕らって事で。これから一つひとつ、二人で作っていけばいい。ところでどうしよう、そろそろ何か食べなきゃね。もうこんな時間だ。」

「あ、確かに。じゃあ買い物に行こう、今度は一緒に街を探検しなくちゃ。」

二人はそう言い合いながら立ち上がる。窓を見遣れば空が、上から順にトリコロールに染まりはじめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7212q/>

児玉夫妻の場合

2011年2月25日19時40分発行